

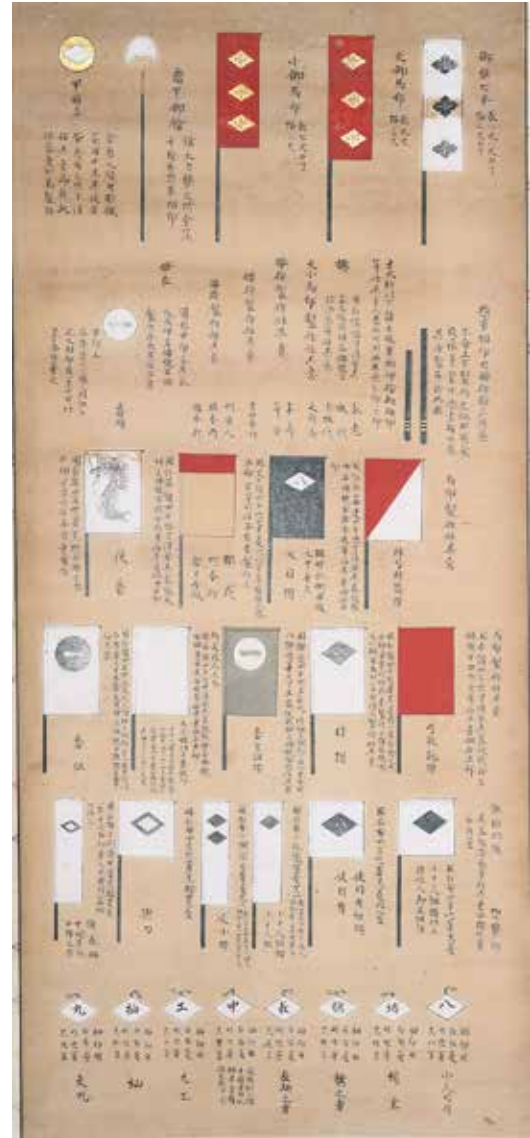


武田二十四将図画

新たに収蔵された資料を紹介します。青野の原井日鳳さんから寄贈していただいた掛け軸2点です。

左側の「武田二十四将図」は、武田信玄と彼を支えた一族や家臣団の武将二十四人を描いたものです。中央右端に落款が押されており、軸裏には戦国期の絵師である「土佐光茂筆」の書入れがあります。中央右端に押された落款も光茂のものに近似していますが、繊細な描き方はより新しい時期のものであると感じさせます。

描かれている人物は、武田神社所蔵のもの(『新編武田二十四将正伝』の表紙)とほぼ同一で、異なる点は武藤喜兵衛の左側の真田兵部と見られる人物の名前がないことと「下曾根下野守」が「曾根内匠」に入れ替わっ



武田家旗指物図

ていることです。今のところ下曾根下野守を名乗る人物は見られないようです。

興国寺城代曾根昌世は武藤喜兵衛(真田昌幸)と対峙して、共に信玄の隻眼と呼ばれたことを彷彿させる精悍な姿に描かれています。

右側の「武田家旗指物図」は武田氏の軍勢の識別のために使用する身分や役目を示す旗指物の規格や図柄の決まりと見本を集合したもので、馬印と旗印、腰指物などがまとめられています。

総大将を示すものは、赤地に金の花菱が三段描かれた幅2尺、高さ九尺の大馬印、高さ1丈以上もある白地に黒の花菱が描かれた白旗7本などとなっています。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

カタカユはダメ！ 七草粥ななくさがゆを行ったら小豆粥あずきがゆも

1月7日は七草粥の日です。日本全国のスーパーマーケットで、セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの春の七草をセットにして販売されており、七草粥を食べる家庭も多いと思います。沼津市内の各地では、七草粥を行ったのであれば1月15日の小豆粥も両方合わせて行わなければならないという意味で「カタカユ（片粥）」はいけないと言い伝えられていることが多いです。しかし、近年は七草粥を行っていても小豆粥までは行わず、「カタカユ」だけの家庭が多くなってきているようです。

一般的に七草粥や小豆粥を食すと邪気を祓うことができる」と説明されることが多いですが、川口家では特にそのようなことは伝わっておらず、代々川口家で続けられている慣習の一つとして行われています。川口家でも七草粥を行ったのであれば、小豆粥も行わなければ縁起が良くないと言い伝えられており、1月7日の七草粥と1月15日の小豆粥の両方を行っています。

小豆粥の調理は女性の仕事であるため、奥様の富美子さんに作り方を教えて頂きました。

<川口家の小豆粥の作り方>

- ① 小豆は一度煮て柔らかくしておきます。
- ② 米はあらかじめ水に浸しておきます。
- ③ 適量の水を入れた鍋に①の小豆と②の米を入れて煮ていきます。
- ④ 煮えてきたら塩を少々入れて味付けします。
- ⑤ 粥になってきたら、その上に薄切りにした餅（写真1）を並べて、餅を柔らかくします。
- ⑥ オブッキ（折敷と皿）や仏飯器おしき ぶつばんきに小豆粥を盛ります。その時、小豆粥の上に餅が一つだけ載るようにします（写真2）。

小豆粥は、朝、川口家が祀る神仏に供えます。川口家では、現在、コウジンサン（荒神）、オエベスサン（恵比寿）、ダイコクサン（大黒天）、ダイジンサン（大神宮）、オイナリサン（稲荷）、トシガミサン（歳徳神）、仏壇ぶつだんに小豆粥を供えています（写真3）。トシガミサンを祀る棚のお飾りは1月7日に下げられていますが、棚自体は15日まで残すため、ここにも小豆粥を供えています。川口さんが海での仕事を続けていた頃は、床の間にオイナリサンとフナダミサン（船霊）が祀られており、フナダミサンにも小豆粥を供えていました。また、川口家が親方家の一家であった巾着網を行う網組で祀っていたリュウジンサン（竜神）にも、小豆粥を供えに行っていました。当時は家から離れたところにあるリュウジンサンへオブッキを持って供えに行

き、供えるとすぐにオブッキを下げて浜辺へ向かい、供えていた小豆粥を海に流していました。網組は解散し、現在リュウジンサンを祀っていませんが、その頃の名残で海に行って小豆粥を流すことをしばらく続けていました。神仏へ供え終わると、朝食として家族で小豆粥を食します。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ・川口富美子氏 昭和21年生まれ 沼津市獅子浜在住）

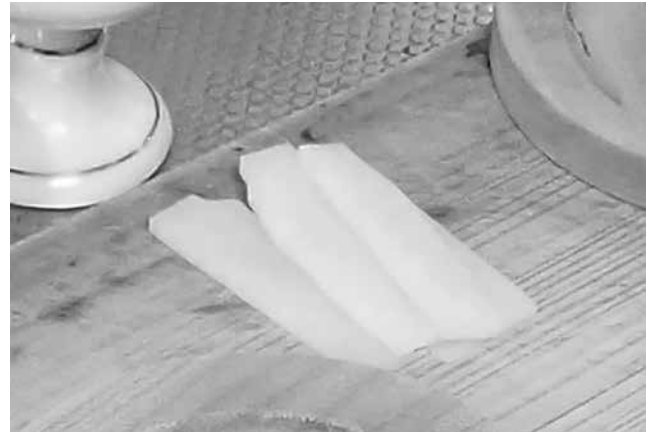


写真1：小豆粥に入れる薄切りにした餅



写真2：オブッキに盛った小豆粥

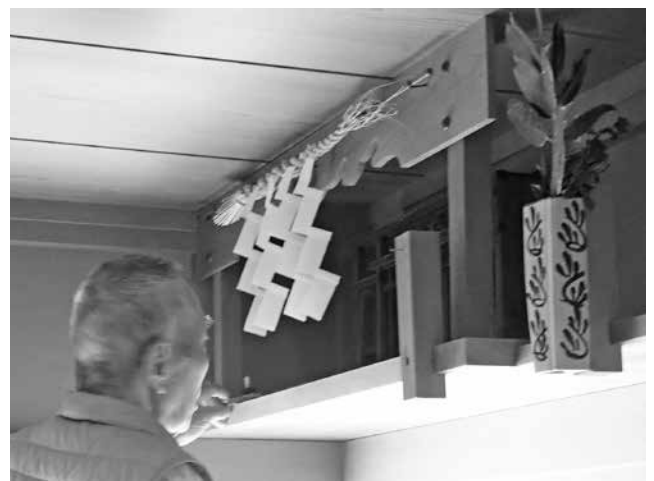


写真3：ダイジンサンに小豆粥を供える川口洋司さん

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■大岡・金岡編 その4 耕作地の礎

●地勢と地質 大正初期に編纂された『金岡村誌』での記載内容を、現代文に訳して紹介しよう。金岡地区の地勢は「愛鷹山の南麓で、駿河湾に近く南面に漸次傾斜して、一番北側の御料林は海拔3800尺、南端では僅かに60尺であり、南方は広々と開けて広闊であり、北に進むに従って次第に狭くなり、あたかも三味線の撥の形に似ている。」とある。また「南方は一帯が田地であり、東部は乾田で二毛作の耕耘であり、牧堰より引水している。中部は二毛作が可能だが、やや湿潤さを免れず、そのために裏作は収穫が劣る。用水は松沢及び葛原沢の流水を利用している。西部では西沢田及び中沢田の一部は低地であり、作土はすこぶる深くて皆水田となっている。」と記す。なお「御料林」は皇室所有の森林を指し、戦後は国有地に移管された。

「また本村中央以北の一面は、畑地で傾斜が緩やかであるためほとんど平坦であり、北に進むに従って傾斜は緩やかでなくなるため、多くは山林であったが、最近では平坦な地を選んで開墾が進んだ。現在では溪谷に沿った嵯峨地（傾斜地）にのみ、その形跡が残っている。北方（愛鷹山）の御料林に至れば、巨木鬱蒼として昼なお暗く、人々の足跡を見ない。」（後略）とある。

同じく愛鷹山麓の地質の項では「一般に腐植質火山灰土であり、極めて軽いローム質の土壌のために粒子は微細で、乾燥すると微風でも飛散する。降雨の際は表土が流失し、長雨の際は土の粒子が膨張してぬかるみ、膝を没する程である。地味は痩せており、窒素の効果が顕著で葉の柔らかい作物の栽培に適する。表土は7、8寸内外で心土は埴土であり、俗に“赤真砂”（赤土）と称し、乾燥は至って早く、亀裂を生じる。」と記す。

簡単な補足をすれば、黄瀬川扇状地の耕地の東西性が示されている。岡一色・岡宮などの「東部」は乾田で二毛作の耕作地が広がり、牧堰より灌漑用水を引水している。東熊堂・西熊堂・東沢田付近の「中部」は二毛作が可能だが、やや湿田性を免れず、裏作は収穫量が劣る。用水は松沢並びに葛原沢の流水を用いている。西部の西沢田・中沢田・沢田新田は低地であり、作土は大変に深い泥の田で全て水田（湿田）である。

●扇状地の特徴 ここで簡略的な地史に触れておこう。御殿場泥流の流下時期よりも以前、約1万年前に流下した三島溶岩流は香貫山に達せず、専ら東側の清水町柿田～三島市北沢間に潜り込んだ。それ以前に三島市北部へは古富士火山起源の「古富士泥流Ⅱ」が流下している。その後溶岩流の西寄りの凹地部に「古黄瀬川」が流れ、約4千年前の縄文晩期の開析に伴って低位段丘が形成されている。縄文晩期の約3千年前後に「古

黄瀬川扇状地」が拡大しており、香貫山の北側寄りでは「カワゴ平軽石流」の二次堆積が広がっていた。

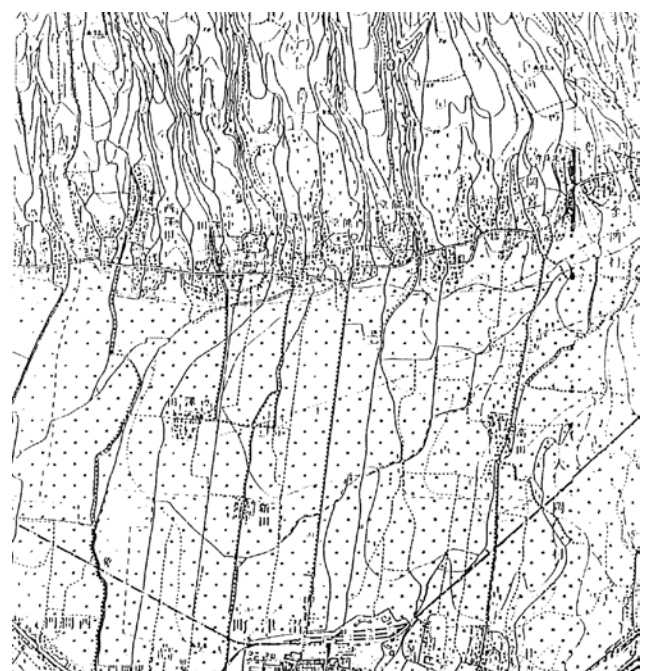
その後の砂礫の少ない特異な「新黄瀬川扇状地」の形成とその拡大の特徴は、弥生前期初頭以後の約2、7千年前から下流域へ向かった「御殿場泥流」の二次堆積物の流下にある。裾野市岩波では三島溶岩流の分布域や既存の段丘の一部が、徐々に埋没している。

この旧扇状地の大規模かつ急激なイベント的拡大により、沼津寄りではラグーン（潟湖）の埋積が一気に進んだ結果、扇状地の前面は三角州状を成すに至った。

また海退による扇状地・三角州の開析の結果、下刻に伴って沖積段丘化が進行した。さらに田方側のラグーンも沼沢地の埋積が進行し、清水町徳倉から沼津市上香貫の「沼津狭窄部」においては、狩野川・黄瀬川の流路も固定して段丘崖が刻まれ、一部で自然堤防の高まりも形成されていった。

これら地形発達史的観点からも、3千年近くの短期間の変遷はユニークとさえ言える。近世以降の新田開発で畑地が卓越するような扇状地農業の特色とは異なる。むしろ灌漑用水路の整備で、古代から中世にかけて開田が進められた地域である。また泥流堆積物のため透水性が強く、地下水面は深い傾向にある。土性は広く分布する「砂壤土」のため、砂に若干粘土が混じり、排水良好な土壌であるが保水性や保肥性は悪い。

表土が薄く、多くの砂礫に少しの砂が混在する上石田から下石田は「乏水地域」で、地下水面が深いため、畑地や桑畑・果樹栽培等の土地利用が顕著であった。なお泥流堆積物の分布が消滅し、耕作不良地の低湿で軟弱な地盤、三角州的な泥質の堆積物へと漸移的に移行するため、扇端部の境界は不明瞭となる。



2.5万分の1地形図 沼津・三島 集成図 大正8年

皇室ゆかりの地 探訪4 千本浜・御座所跡

現在の千本浜の防潮堤が建設される以前には、低い湾曲した防潮堤の内側に低い石垣と玉垣に囲まれた20坪ほどの一段高い区画があり、海側の中央に入口が設けられ、石階段が付けられていました。区画の中央後方には「昭憲皇太后陛下御座所」と刻まれた細長い自然石の石碑が立てられていました。

防潮堤が建設される以前の古い絵葉書などを見ると、海浜の高所からの眺望を楽しむのに適した場所に設けられていたことが分かります。石碑は建てられておらず、竹垣に囲まれた中に立て札のようなものが見られます。

昭憲皇太后が初めて沼津御用邸に行啓されたのは皇后であった明治39年（1906）1月8日のことで、4月18日までの3か月以上の長期にわたって、避寒静養のために滞在されました。「昭憲皇太后実録」によれば同年3月18日に初めて千本浜に御成りになったようです。御座所とありますから着座でき、天幕で囲われたような施設が設けられたと考えられます。以後、毎年御用邸滞在中にはここに御成りになり、景色を楽しみました。

昭和50年、防潮堤の嵩上げ・拡幅工事により石積みは撤去され、石碑だけが近くの植え込みの中に移されました。併せてその右隣に昭和天皇の侍従長である入江相政氏の揮毫による昭憲皇太后の御歌「くれぬまにぬまつのさとにつきにけり しばしみてこむうみのけしきを」と刻まれた歌碑が新たに建立されました。



古い防潮堤の内側となった御座所（加藤雅功氏提供）



防潮堤が建設される前の御座所 絵葉書



園内に移転した石碑と新たに建立された歌碑

歴民からのお知らせ

歴民講座の開催結果について

11月9日に本年度の歴民講座を開催しました。戦国北条氏の研究者である黒田基樹さんから初代早雲の末年に伊豆国西浦と呼ばれていた今の内浦地域に発給された「虎の朱印状」の初見文書を通して、北条氏の判子を用いた行政システムの内容と整備の経過などについてお話いただきました。



講座の会場風景

沼津市歴史民俗資料館だより

2025.12.25発行 Vol.50 No.3（通巻248号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index/htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp